

Title	奥井復太郎の鎌倉調査・再訪：大都市郊外生活と郊外研究の源流
Sub Title	
Author	松尾, 浩一郎(Matsuo, Koichiro)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2001
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.6 (2001.) ,p.86- 89
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	ビューポイント
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20010000-0086

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

奥井復太郎の鎌倉調査・再訪

大都市郊外生活と郊外研究の源流

松尾 浩一郎

1. 郊外という問題

「郊外の夢」が揺らいでいる。これまで長いあいだ、都心の喧騒を離れた郊外住宅地は理想の生活環境だとされてきた。少なくとも都市部のサラリーマン層らにとっては、「郊外・持ち家・一戸建て」を終着地とした住み替えモデルにもあらわれているように、郊外の夢は実効性あるものとして十分に機能していた。しかし、他のさまざまな通念や価値などがそうであったように、郊外の夢なるものも、相対化される運命を待つ一種の神話であったようだ。今や「住み替え双六」は破綻しかかっている。過度の高齢化や空洞化が懸念されるようになった郊外地域も少なくない。そして、「郊外に住むサラリーマンとその幸せな核家族」という像を信じられるほど、われわれは無邪気ではいらなくなっている。

こうした状況を反映してか、ここのところ郊外研究が改めて注目されている。たとえば日本都市社会学会では、2000年度大会と2001年度大会で、2年連続して郊外をシンポジウムのテーマに選んでいる。郊外とその変貌は、今日の社会を読み解くために欠かせない鍵のひとつとなっているように思われる。

昨今の郊外研究にも多様な系譜があり、それらが論ずる内容をまとめることは難しいが、なかでもここで注目したい動きとして、歴史的展開を手がかりにして郊外社会と郊外生活を紐解いていくというアプローチが挙げられる。つまり、郊外なるものの内実を、その形成過程と歴史的社会的背景から捉えなおそうという試みである。

郊外の源流をたずねる作業は、産業構造の変容や都市開発事業など郊外の形成を促した社会的メカニズムや、家族や社交といった面で郊外が育んだ独特の生活様式などを明らかにし、それらが今日のわれわれの生活を規定するひとつの底流となっていることを指摘する。そして、近現代の都市社会と都市住民の社会史を、郊外をキーワードとした新たな視角から物語化する。

こうしたアプローチは非常に興味深い成果を生み出してきた。しかし、今日の視点からだけで郊外の起源を探っていくのには、どうしても限界がある。鶴見俊輔の論じるように、回想する視点だけではなく、期待の視点、つまり、まさに郊外化のただなかにあった当時の視点をも取り入れることができれば、より豊かな物語を組み立てることができるだろう。

日本における郊外化の歴史は、かなり古くまで遡ることも可能ではあるが、今日までの連続性をなどを考慮すれば、一応のところ大正期に原点を設定するのが妥当であると思われる。とくに、大正期から昭和戦前期にかけての郊外化は、新中間層の形成などとあいまって、当時の重

要な社会的関心事となるほどの大きな潮流となっていた。本稿でとりあげる奥井復太郎（1897-1965）は、鎌倉を主な舞台として、こうした初期の郊外化をリアルタイムで体験し、都市社会学者としてつぶさに観察した、郊外研究のさきがけであった。先人の社会学的遺産を土台とした新たな研究を創造していくことが筆者の研究関心のひとつであるが、こうした視点から、奥井復太郎の郊外経験と研究の舞台となった郊外地域・鎌倉を再訪してみたい。

2. 奥井復太郎・生成する郊外の目撃者

日本における都市社会学の先駆者であった奥井復太郎は、名著『現代大都市論』（有斐閣 1940 年）でその名を知られている。奥井の仕事を再評価する気運は高まりつつあり、『奥井復太郎著作集』（大空社 1996 年）が刊行されたことや、1997 年から 98 年にかけて『三田社会学』（第 2 号および第 3 号）誌上で特集が編まれたこと、藤田弘夫『奥井復太郎』（東信堂 2000 年）といった研究書が出版されたことなど、いまだ記憶に新しい。

広い視野を持つ研究者であった奥井は、体系的な都市理論家・生活論の先覚者・フィールドワーカー・芸術家肌の思想家などといった、さまざまな顔を持っていた。そして、彼の学問には、自らの生活に深く根ざした視点から展開されていくという、顕著な特徴が見出せる。郊外研究もその例外ではなかった。

奥井は「江戸っ子」的な人柄で知られている。自他ともに認める東京人であり、東京に強いこだわりを持つ人であった。生まれは東京の上野であり、当時の奥井家は陶器商と質屋を営む下町の一商家であった。1904 年には本郷に移り、一転して山の手の大地主の子供という立場となる。下町で生をうけたものの、少年時代の多くは落ち着いた山の手の環境のもとで過ごすことになる。しかしいずれにせよ、東京での暮らしは、早くも 17 歳の時に終わる。父親の病氣療養などの事情もあり、1915 年には当時東京市外であった大森へ、さらに 1917 年には後に調査の舞台となる鎌倉にほど近い葉山の地へと、転居を重ねていく。当時は、鎌倉も葉山も、行楽別荘地あるいは農漁村という性格が色濃く、一般には東京の近傍とは考えられていない。すでに東京は激しく膨張しはじめてはいたが、大正期前半の時点で東京から 50km も離れた葉山の地に移り、かつ、三田の慶応義塾まで片道 2 時間半もかけて日々通勤通学していた奥井は、際立った郊外生活の先駆者であった。（詳しくは、松尾「社会的実験室としての東京」川合・藤田編『都市論と生活論の祖型』慶大出版会 1999 年、を参照されたい）。

結局、葉山に住み東京に通う生活は、半世紀近くにわたって終生続けることになる。葉山では町会議員を務めたこともあった。しかしそれでも、当地の近隣の人々と親しくつきあう機会は少なかった。奥井家と日常的な接触のある地元の人といえば、御用聞きの人にはほぼ限られていた。東京への通勤者に代表される少数の郊外生活型新住民とは、若干の交際があった。たとえば夫人は自宅で近隣の子弟ら数人にピアノを教えていたという。ただしこうした関係も、新住民のコミュニティといえるようなものではなく、何らかの選択的なつながりがあるもの同士がそれぞれ随意に交流する、というスタイルにとどまっていたという。奥井は葉山に腰を落

ち着けつつも、当地の近隣社会に没入することはなかった。都市的なライフスタイルを守りながら、主に東京とのつながりの中で暮らし続けた。

3. 奥井の鎌倉調査と鎌倉の郊外生活者たち

郊外生活の先駆者であった奥井の研究の眼は、自然と郊外に向かった。葉山に住みつつも「東京人」であり続けた彼の関心は、大都市と郊外との関係構造や、郊外に住む新中間層の人々、そして新住民と旧住民との関係に、注がれるようになる。葉山で培われた問題意識は、近傍の鎌倉をフィールドとした郊外研究に結びついていく。湘南の地・葉山に居を定めてからおよそ 20 年、奥井は鎌倉の調査に取り組み始める。

奥井の鎌倉調査は、当地が東京圏の郊外として周辺に比して特異に発達していることを、住民の属性や行動様式などから検証していくことを主たる目的として、1937 年の春に行われた。東京的勢力がどの程度進出しているのか、従来からの旧勢力とどう葛藤し、それらをどう飲み込んでいくのかを、つぶさに腑分けしようと試みている。

当時は社会学的サーベイ調査の方法論が確立されていなかった時代でもあった。そのためもあってか、鎌倉町（当時・1939 年に市制施行）の全世帯を対象とした戸口調査という手法がとられた。当時の学界には、こうした壮大な調査を愚挙と見る向きさえあったという。それでも奥井は、郊外化のような過去に経験の少ない現象の研究には地道な実証調査が不可欠だ、という考えを変えなかった。調査項目は、世帯構成、在住年数、前住地、職業、収入、通勤通学先、出身校、電話の有無、などであった。回収率は 8 割以上に達し、実数では 5 千世帯・2 万 5 千人を優に超える、膨大かつ詳細な鎌倉町民のデータを得ている。

調査結果は 1939 年の論文「鎌倉町の現代相」「大都市の発展に伴ふ近郊社会の変質」（いずれも著作集第 4 巻所収）にまとめられている。住民の類型などを字別の詳細な社会地図として表現していることにまず眼を惹かれる。そして、当地の郊外生活者の姿を生き生きと描き出している。最も典型的なのは、東京市内の山の手地区から移住して間もないサラリーマンとその核家族で、通勤先は東京に、子弟の通学先も横浜あるいは東京にある、という姿である。また、横須賀の基地に勤務する海軍の職業軍人も多い。こうして奥井は、彼のいうところの東京的勢力、とりわけ山の手的勢力が、旧来の鎌倉町の土壌の上に、急激かつ確実に根を下ろし、人口の何割かを占めるに至っているという様相を明らかにした。

調査データがあまりに膨大であったため、集計は簡単ではなく、研究会の学生はむろん家族の協力までをも得て作業にあたった。それでもなお、現在の視点からみれば、データを十分に活用するまでには至らなかった。すでに個票は破棄されており、再分析の手だてが残されていないことは悔やまれる。ともあれ、戦前期の郊外生活者や郊外地域の姿を正確に描き出した資料は他にほとんどない中で、近代日本における郊外の起源の一面を伝えてくれる貴重な調査であり、郊外研究の出発点とすべき意義を今日でも失っていない。

4. 変貌する鎌倉と郊外のゆくえ

郊外地域としてみた場合も、鎌倉の歴史の特異性は際立っている。明治初の時点では、関東圏の人口稠密地帯のほぼすべてが、城下町・宿場町・港町といった近世以来の町場としての基盤を継承した地域であったが、鎌倉はいずれにも当てはまっていない。目立った産業もない。にもかかわらず、比較的大きな人口を有している。こうした例は、関東ではほぼ鎌倉のみである（藤岡謙二郎『歴史のふるい都市群』大明堂）。初発条件からして、鎌倉はユニークな存在であった。

奥井の調査が捉えているのは、大正昭和期の「第1の郊外化」のうねりが東京圏を襲っていた頃の状況であった。戦争などでいったん収束したのち、1950年代末から60年代にかけて「第2の郊外化」の奔流が押し寄せる。鎌倉はいずれの波も正面から受け止め、郊外化の趨勢の先頭に常に立っていた。戦後の郊外化は戦前のそれとはかなり異なる様相を見せていた。田園と共存する住宅街から宅造団地へと、景観は大きく変容する。なにより、住民の層も、ライフスタイルも、大きく違っていた。「第2の郊外化」は、いわば大衆郊外化であった。

さらに近年になると、鎌倉は人口の急減などに象徴される新しい局面を迎える。郊外の成熟——あるいは衰退？——段階にいち早く達し、なおも郊外と郊外生活者たちの未来を占う重要な位置にある。今日鎌倉を訪れると、長い歴史のなかで蓄積された郊外文化が息づいていると感じられる。そこには、2度の郊外化の波が残した古層が、さまざまな形で横たわっているように思われる。

郊外化の源流を見据えた奥井の観察を定点とすると、今日に至るその後の鎌倉の変遷は、どう見えてくるだろうか。奥井の鎌倉調査を継承する試みは、1950年代後半に、東京市政調査会によってすでに行われているが、それ以降は残念ながら継続的な研究は途絶えてしまっている。「郊外の揺らぎ」を迎えた現在、再び機は熟したのではないだろうか。今、筆者は、仲間たちと鎌倉をフィールドとした研究に取り組もうとしている。奥井の academic son として何ができるか。こうした課題を胸に鎌倉と郊外のゆくえを見極めていきたい。

【附記】奥井の葉山での生活や鎌倉調査の周辺などに関する事情について、奥井四良氏からのご教示をうけました。記して感謝します。

（まつお こういちろう 慶應義塾大学文学部）